H20.9.28.(日) 中国新聞

(第三種郵便物認可)

増える病院がんサロン

語らい 患者や家族の支え

院外受け入れへ 連携を

県内のがん診療連携拠点病院で、患者や家族が悩みや闘病体験を語り合う「がんサロン」を開設する動きが広がっている。抗がん剤の副作用、孤独や恐怖と向き合うすべ…。経験した者だからこそ受け止められる本音のキャッチボールが患者の支えとなり、希望になる。ただ、大半が入院、通院患者に対象を限定しており、院外の患者も利用できるよう求める声が出ている。（門脇正樹）

県立広島病院（広島市南区）で八月二十六日にあった「がんサロン」。同病院での治療経験がある患者や家族、医師ら約四十人が集まり、自らの体験を報告し合った。

明かせる胸の内

「抗がん剤の治療中に意識が急に遠のいたの。痛くも、苦しくもなくてね。正直、あのまま死んでしまいたいと思った」。卵巣がんで入院中の七十歳代の女性は防菌マスク越しに胸の内を明かした。

「治療費がかさむから薬の服用をやめたい」。そうこぼす肺がんの七十歳代の男性を、参加者がこぞってなだめた。「続けなさい。いつか『良かった』と思える日が来るから」。男性はこくりとうなずいた。

県は三月にまとめたがん対策推進計画で、県内十カ所の拠点病院に二〇一二年度末までに、患者の視点に立った情報提供や相談支援の拠点としてサロンを整備するよう求めた。

これを受け、県立広島病院と広島市民病院（中区）、広島赤十字・原爆病院（同）、三次中央病院（三次市）が順次サロンを開設した。参加者から、より悩みが共有できるよう患部別の開催を求める声も挙がり、病院側にとっても患者の声を吸い上げる機会になっている。

「病状つかめぬ」

現時点ではしかし、院外からの受け入れは、患者団体が運営に携わる三次中央病院だけ。県立広島病院の岡村文生総務課長(49)は「院外の患者は状態がつかみ切れず、適切なケアが難しい」と言う。

年内の開設を目指す広島大病院（南区）も当面は利用を院内に限定する方針。担当するがん医療相談員の米田悦子さん(62)は「運営の見通しが立ってから、次のステップとして検討したい」と述べるにとどまる。

こうした現状に、「悪性リンパ腫患者・家族会グループ・ネクサス広島支部」（廿日市市）の中川久美子さん(45)は「気軽にサロンが利用できる体制を一日も早く整えてほしい。患者に悠長に構えている時間はない」と切望する。

自宅で過ごすことを希望する患者の思いや、療養病床の削減もあって在宅療養するがん患者は今後さらに増えると思われる。「駆け込み寺のような存在であってほしい」。そんな患者の声に応えるサロンづくりに向け、行政の支援はもちろん、地域の病院や開業医らとの連携など、関係者の取り組みを求めたい。

県立広島病院で抗がん剤の副作用を学ぶ患者や家族。続く交流会では闘病の悩みや不安を明かし合った

クリック

がん診療連携拠点病院 医療水準の向上と地域格差の解消を目的に、国が2001年度から一定の圏域ごとに整備を進めている。緩和ケアチームの設置▽患者や家族への相談支援▽地域のかかりつけ医も参加できる合同研修会の開催―などが指定要件。県内には10カ所あり、うち広島大病院が中核的な役割を担っている。